



Special feature 熊本県芸術文化祭オープニングステージ
はじまり はじまり ～県劇舞台づくり学校～
Special feature コンサート会場としてのホワイエ
ホワイエでひらく、新しい芸術の扉

熊本県立劇場有料駐車場舗装整備工事のお知らせ

熊本県において、1台当たりの駐車スペースの拡張及び雨天時水たまりの解消を目的に、熊本県立劇場有料駐車場の舗装整備工事を施工することになりましたので、お知らせいたします。
施工に伴い、駐車可能台数が 1/2に減少するため、工事期間中は県立劇場利用者の駐車場いたします。
ご利用の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



- 工 事 期 間 2025年12月～2026年9月頃(予定)
- 工期中駐車可能台数 260台程度(通常時 500台程度)



熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2025 Winter 発行日:2025.12.20 ※掲載内容は11.30現在のものです。

Special feature 特集

力を合わせて、
ひとつの作品をつくりあげる
終わった後の達成感まで、
みんなでクリエイション！

この夏、「舞台づくり学校」と題し、
こどもや学生たちがダンス作品をつくりあげるプロジェクトに挑みました。
公募した学生が音楽や衣裳、映像をつくり、
こどもたちが自ら踊るダンスを振り付けたこの作品。
2025年の熊本県芸術文化祭のオープニングステージは、
その成果発表の舞台となりました。
会場を満たす熱量まで誰かに伝えたいくなるような、
そんなすばらしい時間となった今回の公演。
そのすべてをここで紹介することはできませんが、
公演レポートのはじまりはじまりです。



熊本県芸術文化祭
Kumamoto Art & Culture Festival

熊本県芸術文化祭について

民間と行政が連携して取り組む、県下最大の文化の祭典。ロゴは「芸」をモチーフにシンボル化。1つの作品が波のように広がり、多様な表現が集積・拡散し、心を揺さぶり、多くの人に広がっていく芸術の力を表現している。
オープニングステージはその幕開けを飾る県民参加の創作舞台で、2006年から熊本県立劇場が制作している。

はじまり はじまり く県劇舞台づくり学校く

第67回熊本県芸術文化祭オープニングステージ
2025年9月21日(日)
熊本県立劇場 演劇ホール



創作って楽しい
それが舞台のあちこちに
あふれていた

舞台の幕があがる前の、ホール内に流れるアナウンス。そこから作品ははじまっていました。観劇中の注意事項をアナウンスするのは、パフォーマーのこどもたち。「携帯の電源はオフでお願いします。夢から覚めちゃいます」というちょっと茶目っ気のあるコメントを交えながら、これからはじまる夢の世界に案内する粋な演出が観客の心をまずグッと惹きつけました。続いてはじまるオープニ

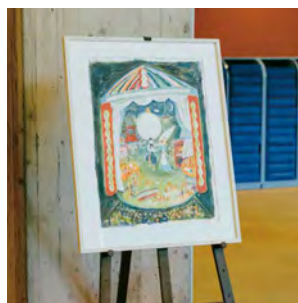
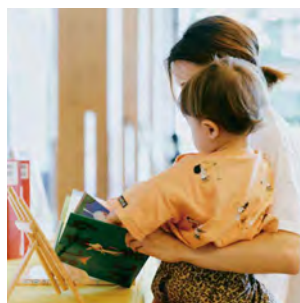
ングムービーでは、普段はみるこ
とができない創作の裏側をみな
さんにご覧いただきました。

動画が終わると、いよいよ開演。オープニングでは県立劇場おなじみの開演のチャイムの音から新しい音が生まれていきます。この音楽に背中を押されるように客席から登場したのはこどもパフォーマーたち。一人ひとりがステージ上をめいっぱいつかって踊り、会場全体が期待感に包まれた瞬間でした。

6月の開校式からはじまり、約4カ月の間準備を重ねてきた今回の芸術文化祭オープニング

ステージは、荒井良二さんの絵本『はじまり はじまり』を原案に、創作ダンスと映像、演劇を組み合わせたオリジナルの舞台。こどもパフォーマー18人と学生クリエイター23人が主役となってつくりあげました。創作活動を指導し、こどもたち、学生たちを叱咤激励し、支えてきたのはダンスカンパニー「プロジェクト大山」の古家優里さんをはじめ、音楽セッションは武田直之さん、衣裳はよこしまちよこさん、映像は志柿聖さん、エンジニア、大迫旭洋さんといった、各分野のプロとして活動する先生たちです。特別ゲストとして俳優、演出家などマルチな活動をする小林顕作さんが加わり、作品を盛り上げました。

それぞれのパートの見せ場は、随所に詰め込まれていました。「ラーメン」「だご汁」「タイピエ」の3つのグループにわかれて、熊本の好きな食べ物を表現したこどもたち。ソロパートでは自分で振り付けたダンスを大きなステージ上から客席に向けて届けます。「いただきます」という元気な声でこどもたちのダンスシーンが終わると、客席からは大きな拍手が送られました。



■ 芸文祭オープニングステージを終えて



写真左から、映像セクション塚本瑠花さん、こどもパフォーマー小川衣紗(いすず)さん、総合演出古家優里さん、衣裳セクション薬師寺心暖(こはる)さん、音楽セクション後田瑞歩さん

総合演出:古家優里(プロジェクト大山)

こどもたちと関わる時は、言葉で伝えようとしても伝わらない。全力でぶつかっていかないと。だからエネルギーとエネルギーのぶつかりあいの日々でした。チームでなにかをつくること、舞台上で同じ空気を共有できたことは、こどもたちも、学生クリエイターたちも素晴らしい体験になったと思います。音楽、衣裳、映像まで学生クリエイターを巻き込むプロジェクトは今回が初めてで、なにが起きるのか想像できていませんでしたが、どんなものでも夢の世界が包み込んでくれて、それが絵本「はじまり はじまり」の強さでした。今回の体験で人と人のつながり、仲間といっしょにつくることの楽しさ、大事さを心に刻んでほしいと思います。またこのようなプロジェクトがあればやりたいので、県立劇場の方たちにも期待しています(笑)。

こどもパフォーマー:小川衣紗(いすず)さん(小学4年生)

ダンスを習っているからそれがきっかけで応募しました。踊りで表現したり、自分の衣裳をつくったりする作業がとても楽しかった。当日は、オフロスキー(小林顕作さん)にも会えてよかった!

音楽セクション:後田瑞歩さん(大学2年生)

インスタで偶然見つけた舞台づくりのクリエイター募集で、一步踏み出してほんとうによかった。みんなで作くりあげる経験と、それが完成した時の達成感といったら、言葉にできないくらいです。

衣裳セクション:薬師寺心暖(こはる)さん(専門学校1年生)

専門学校で服飾のことを学ぶうちに舞台衣裳に興味を持つようになりました。舞台上で衣裳がどう映えるか、動きによってどう変化するのか、考えながらつくる作業は楽しく、当日はそれを観て感動してもらえるおもしろさを知りました。

映像セクション:塚本瑠花さん(高校2年生)

将来は舞台や映像の美術方面に行きたいと考えていたので、楽しそう、と思って参加しました。映像の絵コンテづくりから監督、そして声あてまで担当して、これまで17年間生きていて、一番ワクワクした経験でした。

閉校式が
これからの創作活動の
第一歩になる

芸文祭のオープニングステージのプロジェクト「はじまりはじまり」県劇舞台づくり学校」は、青森県八戸市「八戸ポータルミュージアムはっち」で

実施された舞台づくり学校を参考に企画。「はっち」の舞台づくり学校でも実施されたこともパフォーマーたちのダンスのクリエイションに加え、県立劇場では、音楽、衣裳、映像まで、舞台づくりそのものに学生のクリエイターが取り組みました。最終的にどんな作品に仕上がる

のか、手探りで進められたプロジェクトでしたが、公演を終えた後のこどもパフォーマー、学生クリエイターのそれぞれの顔には、なんともいえない充足感と達成感が滲み出ていました。舞台の幕がおりた後、その舞台上で行われたのが、修了証を授与する閉校式。お客様にも余韻を

共有するため、この様子を客席から自由にご覧いただけるようにしました。舞台を堪能した多くの観客も残ったまま閉校式を「観劇」。閉校式までがひとつの作品となり、参加者や観客一人ひとりの心に深く刻み込まれました。



閉校式での修了証の授与には、それぞれのパートの先生たちが一人ひとりの名前を呼び、修了証を手渡し。これまでの振り返りとともに先生からコメントが寄せられました。

■ 各セクション先生のコメント

音楽の先生:武田直之

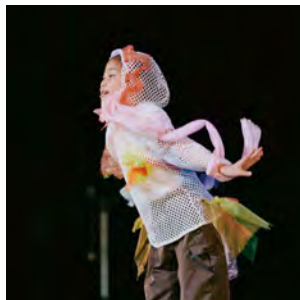
私自身、自問自答しながら取り組み、みんなのおかげで先生になれたと思っています。今回の企画に飛び込んだように、これからはいろんなことにチャレンジしてほしいです。

衣裳の先生:よこしまちよこ

衣裳セクションには定員5名のところ9名の応募があり、悩んだ末全員参加してもらいました。学生たちが自ら考え、衣裳づくりに取り組んだことは貴重な体験になったと思います。

映像の先生:志柿聖、Hub.craft、大迫旭洋

思いをどう映像にのせられるかをテーマにして取り組みました。今回のプロジェクトで楽しいと思ったこと、ワクワクした経験を糧にしてほしいです。



学生クリエイターたちのクリエイションも舞台を支えました。映像セクションの作品は、江津湖を舞台につくられた「風」が語りかける記憶のものがたり。映像制作に加え、ナレーションも学生が担当し、どこか哲学的な世界観が伝わってきました。音楽セクションと衣裳セクションの見せ場となったのは、「プロジェクト大山」のダンスシーンと加藤清正などが登場する演劇シーン。音楽と衣裳のセクションが協力し、学生クリエイターたちは自身が表現したいことに挑戦しながら、舞台上での機能性や作品のクオリティを保つという

課題に取り組んできました。自分たちの創り上げた作品が舞台上からお客様に届く瞬間を、学生クリエイターたちは客席から息をのみながらすと見守っていました。こどもたちや学生たちの作品を、まるで接着剤のようにつなぎあわせ、夢の世界に仕立てるのがマクラさん役で登場した小林顕作さんです。パジャマ姿でふとんに入り、絵本の朗読でものがたりを紡いでいきます。途中、観客とかけあいで行くマクラさんの歌謡ショーなどが入り、4カ月かけて準備してきた集大成が、フィナーレを迎えました。

本番の幕があがれば、あつという間に過ぎてしまう1時間ちょっとの舞台。それをつくりあげるために、どれだけ時間をかけ、知恵をしぼり、対話をして、練習を重ねて準備をしているのか。たった一度限りのわずかな時間で、観ている人たちをどれだけ楽しませ、記憶に深く刻まれる公演を提供できるのか。パフォーマーとしてその舞台に立つたこどもたち、裏方として舞台づくりに力を尽くした学生クリエイターたちは、ほかでは決して味わえない、この先何度でも咀嚼して思い出しなくなるような経験をしたいです。



客席中央にサブステージを設けた朗読劇



観客とアーティストが同じ目線で



開放的なホワイエでのダンスワークショップ

熊本県立劇場では2021年に新しい施設の利用区分が誕生。これにより、ステージ上やホワイエなどの部分利用が可能になりました。これをきっかけに始まったのがホワイエサロンシリーズです。ホワイエの空間をより身近に感じ、様々な公演を楽しんでいただけに工夫しながら公演は回数を重ね、2025年12月現在、12回の公演を実施しています。

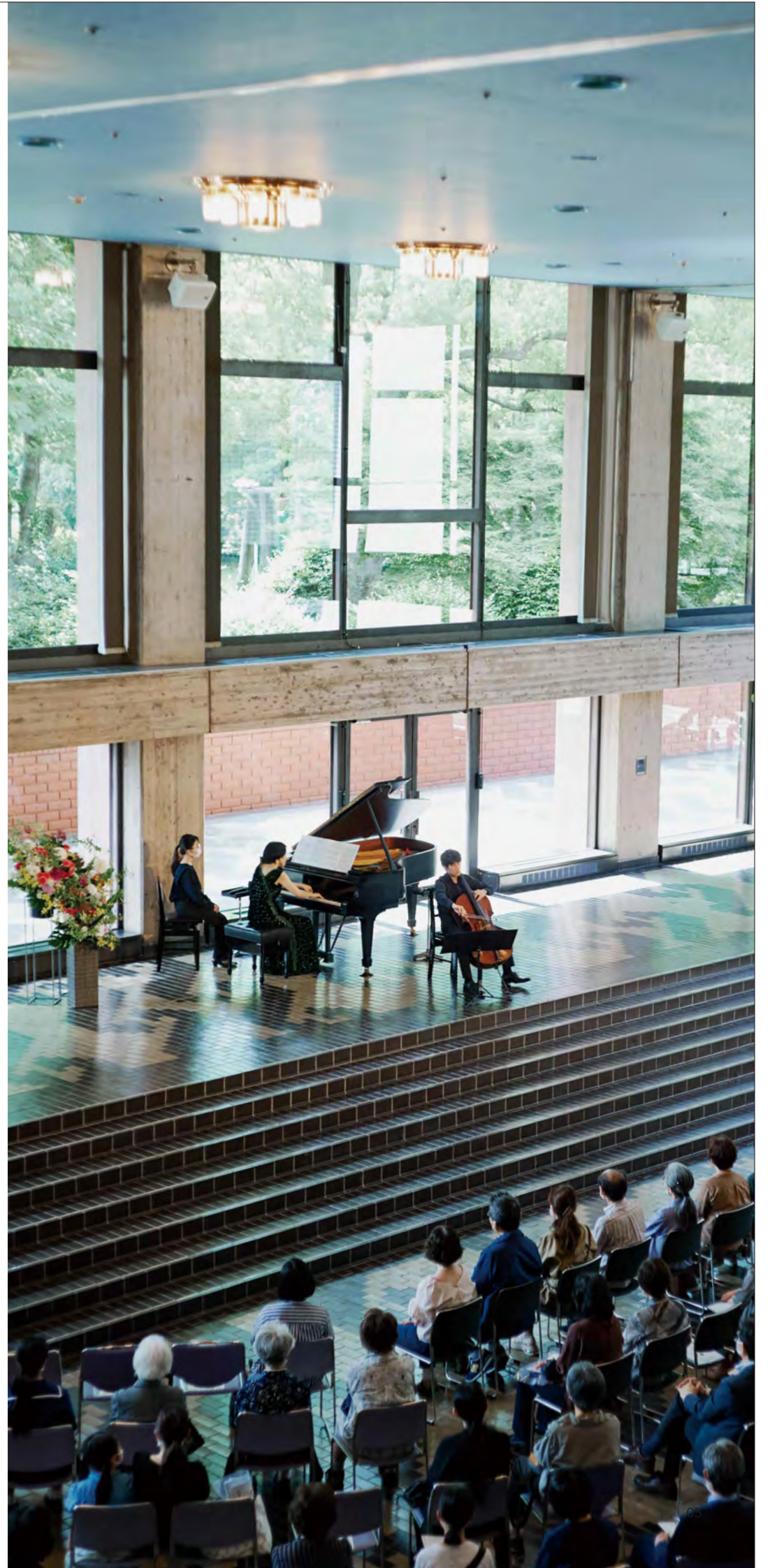
客席の椅子を並べると、200席程度の小ホールのような空間ができあがります。階段の踊り場や2階通路からの演奏など、導線も活用しながらクリエイティブな演出を楽しむアーティストも。大きな窓からは劇場外の木々も見え、開放的な空間がアーティストにもお客様にも好評です。ステージや椅子の配置によって様々なレイアウトに対応できることから、公演の自由度も高く、コンサートだけでなく朗

読劇やダンスワークショップなども実施してきました。ホワイエサロンシリーズは県立劇場が主催する公演ですが、他の主催者様からも公演会場としてホワイエが選ばれ始めています。柔軟に形を変えていくこの空間は、ホールとはちがった新しい芸術との出会いの場。次のホワイエでの公演ではいったいどんな出会いが待ち受けているのでしょうか？ぜひ、ホワイエを会場とした公演に足をお運びください！

Special feature コンサート会場としてのホワイエ ホワイエでひらく、新しい芸術の扉

熊本県立劇場のコンサートホールで、最初に私たちがお客様をお迎えする空間がホワイエです。この言葉の語源はフランス語の「Foyer」。劇場やホールの客席からエントランスの間の広い空間のことを指します。開演前にゆったりとした時間を過ごしたり、終演後の余韻に浸ったり、楽しい時間を過ごす場所。そんなホワイエが今、コンサート会場として活用されています。

階段上をステージとして
小ホールのような空間に



1990年に「総合婦人会館・カルチャーセンター」として開館し、男女共同参画社会の熊本市の推進拠点として、さまざまな啓発事業や市民文化の振興、交流の場を提供している「熊本市男女共同参画センターはあもにい」。

35年もの間、ジェンダー、多様性の視座に立った人材育成、情報発信に注力し、独自のネットワークや知見を生かした自主事業を展開する一方で、施設貸し出しを通して芸術文化活動にも取り組んでいます。「はあもにい」には



観客との距離が近く、レイアウトの自由度が高い多目的ホール

個性光る県内の公共ホールをご紹介
熊本市男女共同参画センター
はあもにい(熊本市)



はあもにい
トップページ



熊本市男女共同参画センター はあもにい
熊本市中央区黒髪3-3-10
電話:096-345-2550

372名収容のメインホールと200名収容の多目的ホールの2つのホールがあり、発表会や講演、朗読会、ファッシュショーなど、幅広いジャンルでの利用が可能です。準備の段取り、会場のレイアウト、イベントの構成、演出方法など、細かい点まで技術者がアドバイスしてくれるので、はじめてのホール利用でも安心して準備を進められます。県立劇場と連携した舞台づくりの技術者育成をはじめ、それぞれの持つノウハウを活かした市民の文化振興に向けたプロジェクトも準備中です。



季節のデザートはコーヒーとセットで1,500円(税込)
単品1,200円(税込)で提供



ホームページ



Instagram

西本珈琲
熊本市中央区新大江2丁目2-26
県劇から徒歩4分程度
096-363-0061
営業時間／11:00～夕方Close
定休日／日・月曜日
駐車場／7台



県劇職員のおすすめを紹介する「県劇リコメンド」。今回は県立劇場の南側にある「西本珈琲」を紹介しします。

今年で創業50年を迎えた西本珈琲は、創業時からご家族で営業する老舗喫茶店です。可愛らしい小物やドライフラワーで飾られた店内は、ゆったりとした時間が流れています。

季節の果物をメインに使った大人気のパフェは構成や食感にこだわった一品。取材時は、手間暇かけて柔らかに煮込まれた栗

黄色の屋根が目印の喫茶店
西本珈琲

の渋皮煮や滑らかなシャンティクリームを使ったモンブランパフェでした。優しい甘さのパフェは、最後にさっぱりと食べ終えられるように工夫されているそうです。

季節のデザートは、冬から春はイチゴや柑橘類、夏は桃、秋は栗といった旬の果物が美味しく味わえる期間限定のメニュー。期間によっては、パフェ以外にもクレープやケーキが提供されることも。他にも、お土産用にスコーンやマフィンなどの焼き菓子販売もあります。午後のおやつのにぎひお立ち寄りください。

利用団体公演レポート

ラスカーラ・オペラ協会 設立15周年記念演奏会
2025年11月3日(月・祝) 熊本県立劇場 コンサートホール



中学生から70代まで、協会がつなぐ熊本の芸術家たち。マストランジェロ氏の指揮は、実に10年ぶり

嵐の海、激しい風、人々の嘆き。

「ラスカーラ・オペラ協会」の設立15周年記念演奏会の一曲目にセレクトされたのは、同協会の設立のきっかけとなったマエストロ、ステファノ・マストランジェロ氏の指揮で2010年に上演したオペラ『オテッロ』の第一幕冒頭「嵐の合唱」でした。「目をつむってみると、その物語を知らない人でも情景が広がる。頭で理解することを超えた感情に届くのがオペラの力です」とのマストランジェロ氏の言葉通り、冒頭からホールに臨場感あふれる空気が広がりました。今回の演奏会はマエストロが選曲したオペラの一部分のダイジェストを集めた全17曲。CMやTV番組など、何らかの形で耳にしたことがある旋律も含め、ダイレクトに感情に届くようなセレクトが印象的な組み立てでした。



ステファノ・マストランジェロ氏とラスカーラ・オペラ協会代表の岩本貴文(一般社団法人ラスカーラ・オペラ振興会理事長)さん。二人が敬愛する指揮者シノーポリ氏が結びつけた「ラスカーラ・オペラ協会」の活動は、地域で活動する素晴らしい芸術家の存在を、熊本の地から発信しつづけています。

当日は客演ソリストを含め、中学生から70代まで幅広いメンバーで構成され、一曲ごとに代表である岩本貴文さんの解説が入り、終始和気あいあいとした雰囲気が進められました。

「ラスカーラ・オペラ協会」は、オペラ専門の合唱団と管弦楽団が統合し、2011年に設立。「地元である熊本でオペラの文化を広めたい」との代表の岩本貴文さんの情熱に答え、その設立時に5年間の期限で芸術監督となったのがマストランジェロ氏でした。15周年を迎え、今後も熊本の地から情熱を生みだし、常に火を灯し続けて、質の高い公演を届け、いくつ決意を新たにしました。

インタビューの詳細は、
ウェブサイト
FOYERに掲載





いけばな松風 鳴海応波作 「感謝」



Webサイト「FOYER」でも
生け花の写真を紹介しています

華道協会 「季節の生け花」

県立劇場では、開館当初の頃より熊本県華道協会(吉村皓月理事長)のご協力のもと、エントランスロビーにおいて生け花の作品を常時展示しています。年間96回生け花の入れ替えを行い、県立劇場を訪れる来館者に癒しと寛ぎの空間を提供しています。

本年度に生け花の作品を展示した流派

肥後宏道流、龍生流、養真流、いけばな松風、花芸安達流、
熊本末生会、真生流、洗心雲林派、専心池坊、知香流

県立劇場ギャラリー

旧暦の世界

まだ、母が健在の頃、我が家は新暦の正月ではなく、旧暦の正月(ソルラル)が盛大な祝日になっていた。月の満ち欠けを主軸に太陽の動きで調整する「太陰太陽暦」(旧暦)は、農耕や漁撈を生業とする人々には自然の律動を知るうえでとても便利だった。そのせいか、母はよくこの季節は貝の身が引き締まって美味しいとか、この時期のカニは身がスカスカでまずいとか。実に博物学者と考えるほど、詳しく、実際に母の「診断」は当たっていた。

旧暦は、ある意味で母を自然と繋げる「臍帯」のようなものだったと言える。生意気盛りの十代の頃の私は、旧暦の世界が因習に塗れた旧世界のように思え、母の季節感に強



3年前、箱根の菜園で

い反撥を感じたものだ。

あれから半世紀以上が経ち、自然との「臍帯」を断ち切られて、自然の律動と人事が益々乖離していく世界の変化の中にいると、時おり、母の旧暦の世界が無性に懐かしく思われる時がある。西条八十の詩「ぼ

くの帽子」にあるように、「母さん、僕のあの帽子、どうしたでせうね?」と問いかけた。気持ちに駆られる。「あの帽子」――すべてが旧暦によって動いていた母との「記憶」のことである。私の齢も益々、母に近づきつつある。

館長室から

姜尚中

【県劇NEWS】県劇オリジナルグッズのご紹介！

来館時の記念品としてご購入いただける、県立劇場オリジナルグッズ、手ぬぐいとクリアファイルを管理事務所窓口で販売しています。

手ぬぐいは劇場床タイルに描かれている「吉原繋ぎ」の模様を完全再現。シックな印象で日常使いにもおすすめです。県劇の外観をモチーフとしたイラストが描かれたクリアファイルは楽譜や書類入れとしてご利用いただけます。劇場にご来館の際は、ぜひ管理事務所にお立ち



手ぬぐい(税込1,000円)とクリアファイル(税込200円)

①下記の二次元コードよりお名前とメールアドレスを送信ください。自動返信メールにてお問い合わせフォームのURLをお送りいたします。

②送られてきたフォームに、下記内容を記載してお送りください。

お問い合わせ内項目 その他
お問い合わせ内容 「県劇オリジナルグッズ」プレゼント希望

(締め切り2026年2月末日)



事業グループ

山崎 拓哉(やまさき たくや)

アマチュア奏者として

「好きなことを仕事にしたい」と38歳で県劇に転職してもうすぐ3年。県劇が主催する様々な事業について企画・運営する「事業グループ」に所属し、忙しいながらも充実した愉快的な毎日を送っています。

プライベートでは一般吹奏楽団「碧落アンサンブル」でサクソフォンを吹いたり、トレーナーとして指揮をしたりしています。こちらは社会人になるときに入団しましたから、約19年になりますね。サクソフォンを始めたのは小学5年生のとき。音楽の先生から吹奏楽部に誘われたのがきっかけでした。それから小・中・高・大学と吹奏楽部でサクソフォンを続けました。

中3のとき、恩師の1先生から「音楽の道に進もうと思わないのか」と聞かれました。15歳だった私は分からないなりに真剣に考えて、「音楽は趣味で続けよう」

■県劇職員が本音を綴るリレーコラム

と思いついた記憶があります。そのとき楽器歴はまだ5年程度ですが、技術を磨いてプロ奏者になる……という道がどんなに前途多難なものなのか、何となく想像できてしまったのかもしれない。

ですので、出演者として県劇に来てくださるプロ奏者の皆さまには心からの尊敬の念を禁じ得ません。舞台袖で捕まえて根掘り葉掘り聞きたいことは多々あるのですが、ぐっとこらえて、ステージに送り出しています。

一方で、県劇を利用いただくアマチュア団体の皆さまに対してはジャンルを問わず、勝手に仲間だと思っています。仕事をしながら企画を考えて、スケジュール調整して練習して、打ち合わせして本番に臨む……楽しいけどたいへん。安心してください。県劇にも、気持ちのわかる仲間がいますよ。

県劇職員として、アマチュア奏者として、自分も楽しみながらご来場の皆さまに楽しんでもいただける企画をお届けできるよう、精進してまいります。ぜひお好きな公演を見つけて、県劇に遊びに来てくださいな。